なあ、よかったなあ」と抱き合って祝福しあった。
その時、母の背中に負われていた盲目の少女が、その場の感激を破るように、
「おかあちゃん、みかんちょうだい」と訴えた。
母親は涙にむせびながら、頭陀袋の中からみかんを一個取り出して、背中の子に渡そうとした。すると、少女は、いつものように手を泳がせることもなく、さっとみかんを受け取ったのである。
「おまえも見えるのか！」
母親が叫ぶと背中の少女はうなずいた。母親はワーッと泣き伏してしゃがみ込み、帯をほどいて少女を降ろした。少女の眼が見えたのである。

十五歳の少年だけは、開眼していなかった。喜びに沸き立っていた一行は、またしゅんとしてしまった。しかし付き添いの父親は、「私どもの信心が足りないのです。どうか、ご安心ください。きっとお蔭をいただきます」ときっぱりと言った。
一行と私は、最後の札所となっている八十一番行者堂に向かった。仲間と合流する時間になっていたが、しかたないと諦めた。

行者堂の前で、少年の父は私に「いま一度、九字を切ってください」と依頼した。
そうは言われても二十歳の青年である私に自信があるわけではない。しかし先ほどのことがあったので、「はい」と受けざるをえなかった。
少年がお祈りしている後ろ姿に、思い切り「九字」を切った。少年はピクッとするほどショックを受けたらしい。
やがて一行の参拝が終わり、行者堂を去ろうとした時、少年がこう叫んだ。
「お父さん、眼が見えそうだ……」
一行は色めき立ち、再び行者堂に戻って、一心不乱に祈禱を始めた。そしてその祈りが終わった時、少年は「確かに見える」と言ったのである。

一行の人々は、私を「生き仏」「弘法大師の化身」と崇(あが)めだしたが、私はそれを否定した。訳の分からぬままやったことで、むしろ感激を通り越して、ポカンとしているくらいだった。住所と氏名が書いてある「納め札」をくれと言われたが、それも堅く断わった。
そして逃げるようにして一行と別れ、仲間との合流場所に急いだのだった。
彼らはその夜、土庄町の宿屋を虱潰(しらみつぶ)しに探して、私に礼を言いに来たが、私は名前も